きのこ栽培は「子育て」と同じ

―株式会社柿の木農場―

職場ルポ

WORKSHOP REPORT

（文）清原れい子　（写真）小山博孝

株式会社柿の木農場
〒388-8004　長野市篠ノ井会字条仁1054-1
TEL 026-293-5190　FAX 026-293-6263

「障害をもった人たちと共に働く」をモットーに、知的障害者が地域社会で自立して生活できることを願う「柿の木農場」社長の柿島滋さん。その取り組みをご紹介する。

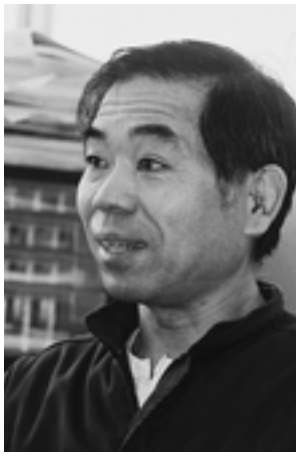
実習の受け入れから知的障害者を雇用

長野駅から松本方面へ車で二〇分ほど、田園地帯に今回の訪問先「株式会社柿の木農場」の「工場」が見えてきた。九名の知的障害者を含む一九名の社員が、えのきだけを生産している。一見、機械の製造工場のようだが、一つひとつの培養ビンの中で生産されるえのきだけは、れっきとした「農産物」。長野はえのきだけの発祥の地で、全国生産高の六〇%を占めている。栽培用の培養ビンを六〇万本所有する「柿の木農場」は、県内で二、三番の大手だそうだ。

会社の設立は一九七八年。オーナーは長野の製粉会社の経営者で、最初は金属製品の加工販売を手がけ、三年後からえのきだけの栽培を始めた。

社長の柿島滋さんは工場長募集を知って応募し、八三年に横浜から転職した。

「山が好きですし、空気のいい信州で生活したいとこちらに来ました。転職二年後に社長が体調を崩し、経験は少なかったのですが、社長に就任することになりました。そのころ、養護学校からオーナーの製粉会社に知的障害者の実習を受け入れてもらえないかという話があり、きのこづくりのほうが働く場がありそうだということで、実習を受け入れました」とはいえ、誰も知的障害者と接した経験はなかった。


柿島滋社長

「簡単な掃除などから始めて、だんだんときのこづくりの仕事を手伝ってもらいました。それで終わりかと思っていたら、『今年もまたよろしくお願いします』と実習を頼まれて、『先生、これは就職させてほしいということですか』と聞いたら『できれば……』と言われました」

八七年、最初の知的障害者が入社した。「当時の従業員は一〇名。知的障害者のことをまったく知らないところからのスタートでしたから、いろいろなJ藤がありました。最初は、知的障害者は話したことがわからない、計算ができないとしかとらえていませんでしたが、勉強を始めて、この人にはこんな能力がいっぱいあって、こういう個性があるという見方をするようになりました」

会社は、高速道路建設に伴い九三年に現在地に移転、現社名に改めた。

「いまは養護学校から実習に来ると、本人の性格、成育歴、学校での様子など、できるだけ詳しく聞くようにしています。その上で指導するほうが職場に早く適応できます」

知的障害者との出会いをつづった「障害をもった人たちとともに　柿の木農場と障害者雇用―十年の挑戦」は、平成九年度（九七年）の「障害者と共に働く提言・手記」で労働大臣賞を受賞した。

「できない」と決めつけず可能性を見つける

柿の木農場のえのきだけは、消費者の顔が見える取引をしたいと二十年も前から産直にこだわり、大阪、神戸のスーパーを中心に出荷している。売上高は一〇期連続の上昇で、黒字経営が続いているが、今年はとくに阪神の優勝の影響で発注が多い。

「えのきだけは農家が副業として人工栽培を始めたのですが、高齢化と施設の老朽化が進み、小規模の生産農家がこんなにと思うくらい撤退をして、技術革新と施設の改良に対応できるところが残っています。価格も安くなっていますが、えのきだけは健康食品ということもあ

り、需要は安定していますね」

栽培の順序は、とうもろこしの芯やふすまを粉末にしたもの、米ぬか、おがくずなどの培地を培養ビンに詰め、高圧殺菌をして菌床をつくる。次にクリーンルームで菌を接種、約二五日培養した後、菌かき作業で種菌を取り除く。栽培室で育てながら、不純物を取り除き、まっすぐに伸びるように一本ずつケースを巻き、そして収穫、包装、出荷となる。

「農業ですから、相手は生きものです。最近は機械でつくる工場も出てきていますが、それだけでいいものができるだろうかというのが私の思いです。節目節目で手を抜くと、品質が悪くなります。きのこの顔を見ながら対話をして、一つひとつやさしく育てていくことが大事です。子どもを育てていくのと同じですね。作業はすべて大事ですが、とくに雑菌に弱いので、クリーンルームで接種をしています」

障害者のリーダーとして活躍する
三木俊雪班長（34歳）

接種室の温度は、きのこに初秋を思わせる一八度以下。それ以上だと雑菌が先についてしまう。柿の木農場のクリーンルームは一五度に保たれている。

「仕込みや高圧殺菌、接種、菌かきなどは自動化されていますが、各工程間で培養ビンを入れ替えたり、移動したりなど、知的障害者ができる作業があります。ほとんどの人たちがさまざまな作業ができるようになっていますが、いちばん得意そうな分野に配置して、より賃金を得られるようにしています」

賃金は、健常者対比の生産性で決めている。

「原則として最低賃金を維持する給与体系を考えていますが、多くの障害者が働けるような方向をめざすには、個々の障害者の作業能力を正確に評価し、作業能力に応じた額を支払う。そのための除外申請は必要だと考えています。給料は銀行振り込みですので、働いても紙切れだけという認識の人もいます。会社でも労働報酬について関心をもたせるようにしていますが、働いたお金の価値は親がきちんと教えてほしいですね」

接種作業（培養ビンにきのこの菌をまく）
のベテラン、田本理歩さん（40歳）

新入社員の教育は、総主任で障害者職業生活相談員の和田さちゑさんが担当している。とてもやさしい雰囲気の「お母さん」だ。

「その人に合う仕事と合わない仕事がありますから、得意なところを伸ばしてあげられればと思っています。あの作業をしてみたいと言えば、喜んでやらせています。あきらめないで教えていくうちに、意外なところで可能性を発揮したりします。誰にも可能性はありますから、できないと決めつけないで、できるようにしてあげるのが大事だと思います」

社長とともに障害者雇用を支える
夫人の柿島久子さん

「仕事に励む「個性ある人たち」

採用から職場定着まで、そして定着し

てからも、日々さまざまなドラマが繰り広げられている。取材があると聞き、美容院や理髪店に行き、私たちを迎えてくれた人たち。その中から何人かの横顔をご紹介しよう。

入社第一号は三木俊雪さん。一人で通勤ができるまで何日も付き添いが必要だった。もう大丈夫と手を放したら行方不明に。あちこち探していると、在籍していた施設から「ここにいます」と電話がきた。

「一〇歳から施設で育ち、いじめにもあったそうで、防衛本能というのでしょうか、人を信用できなくなっていました。まわりの人たちとの信頼関係を築くまでに時間がかかりましたね」

その三木さんもすでに勤続十六年。いまは班長である。

「仕事は慣れました。家では、自分たちの自立の勉強をちょっとしています。得意な料理は手打ちうどんです」

体幹機能障害がある田本理歩さんも入社して十年を超えた。

「就職させてほしいと頼まれたのですが、できそうな仕事がない。そのとき初めて障害者を雇用するための助成金があることを知りました。機械を使えば、何とか作業ができるのではないかと考えて、自動接種機を助成金で導入しました」

田本さんが培養ビン一二本入りのコンテナをローラーに乗せると、接種機が自動的に接種していく。この作業に三時間。残りの時間はダンボール組み立ての仕事をする。接種室の主任は、社長夫人の柿島久子さん。障害者職業生活相談員でもある。

「安全には気を使っています。安全のことはよく理解できない人が多いので、しつこいくらいに注意していますね」

小山浩さんは入社して八年。いろいろな仕事の中で、菌かき作業後の培養ビンを積む仕事がいちばん気に入っている。最寄りの篠ノ井駅から三〇分近くを歩いて通う。

収穫の終わったビンの清掃ひとすじに頑張る杉村英人さん（22歳）

三木班長のもとで働く小山浩さん（28歳）

収穫したきのこの袋詰め作業に忙しい三木小枝さん（26歳）

「社長は、ふつうにしているとやさしい。悪いことをすると怖い。でも、悪いことはしていません……」

「風邪をひいて休むと連絡してくるとき、自分の作業を誰がするのかを心配します。そういう責任感がありますね」

収穫後の培養ビンから廃培地をかきだす作業が得意なのは、杉村英人さん。ニコニコと仕事をしている。

「自閉症の彼が実習に来たとき、採用はむずかしいと断ったら、養護学校の先生とお母さんが、『二週間で表情が変わって、笑顔がたくさん出てきました。喜んで会社に行くんです。何とか就職させてください。給料はいりません』と。そう言われても、会社は経営です。どうがんばっても無理だと思ったのですが、一年間の職場実習に挑戦してみました」

最初にできるようになったのは、培養ビンを機械に入れる作業。三ヵ月経ったら、機械から出すほうの作業ができるようになった。ただし、両方の作業を同時

障害者のよき相談相手となり指導にあたる和田さちゑ総主任（左）

にこなすのは無理だった。

「ビンを入れる自動かきだし機を組み合わせて、ビンを出す作業だけをすることにしました。ほんとうは事業拡大のため、ほかの人に訓練させたいのですが、ほかの人に作業をさせるとパニックになります。この仕事に限れば一人前、絶対人に譲れない職場なんです。風邪もひきませんし、休みません。自分のペースでは、よく話すようにもなりました」

三木小枝さんは、三木俊雪さんの妹だ。

「和田さんはやさしい人です。たまに注意されることがあります。仕事中にトイレに行ったりすると……。タイムカードを押したら、仕事時間。給料をもらっているから」

料理が得意で、結婚したい相手がいる。

「得意な料理は、オムレツ、ハンバーグ、ナスの油味噌、野菜炒め、……えのきだけはバター炒めがおいしい」

「ハンバーグは本格的で上手ですよ。焼きあがって盛りつけてから、ごちそうになります」と社長。

小池裕さんは自転車通勤四〇分。塩野入和男さんはバイクの免許を取得して、運転免許に挑戦中。高橋武志さん、中島健さんも元気に働いている。

その日は仕入れで不在だったが、昼休みには工場長の田橋浩二さん自らドリップ式のコーヒーを入れるコーヒー店がオープンする。一杯一〇円。

「工場長の存在は大きいですね。三四歳で、みんなのいいお兄さんです。工場長、工場長と慕われています」

作業所設立、新工場建設、グループホームの計画も

地域の人たちに障害者が働いている会社を理解してもらいたいと、九七年から三年ごとに「柿の木農場文化の集い」を開いている。

「障害をもった人たちが、みんなとともに働き、自立しようとしている。そんな姿を知っていただければと、職場のみんなで文化の集いを企画しました……」

会場は作業場。障害者自らがつくった「ぼくたちわたしたちのきのこ作り」のパネル展示や、職場や地域の人たちの絵画、写真、陶芸などの作品展、コーラスやアンサンブルの演奏もある。手打ちうどんを実演し、得意料理も披露する。その模様をつづった論文は、九八年の「職場改善コンテスト」で日本障害者雇用促進協会会長賞を受賞した。

三年ほど前には障害者の親たちと「どんぐり福祉会」を立ち上げ、グループホームや通所授産施設を運営する社会福祉法人の設立をめざしている。昨年三月は会社敷地内に「どんぐり共同作業所」を開所し、現在一〇名のメンバーがいる。

「すぐには一般就労がむずかしくても、会社の近くで作業をしたり、職場で実習をすると刺激を受けて、ものすごく伸びるのがわかります。この三月には作業所から一人入社しました。また高齢化した

育成室で製品整理をする小池裕さん（32歳）

入社して半年になる塩野入和男さん（19歳）は、現在、車の免許取得に挑戦中

ら、会社をすぐ辞めるのではなく、会社で三時間働いて、その他の時間は施設にというように、企業と福祉の連携が大事だと思います。地域障害者就労支援ネットワークにも参加して、仕事以外のことも学んでいます」

社長宅は工場の隣。一階には社長夫妻と一緒に働き始めた子息の哲史さんが住み、二階が三木兄妹の寮になっている。風呂、食堂、部屋と掃除が行き届いている。

「家庭生活ができるようにと、食事づくりなどを教えています。やらされているという思いもあるかもしれませんが、自分たちでできることは自分たちですることが、自立に必要だと思っています」と久子さん。

「家に帰ったらお父さんお母さんがいる、普通の家族をと考えていたのですが、二人には私は社長だという緊張感があります。職住同一管理者の生活は好ましくないと思い、グループホームを考えるようになりました」

歩いて数分のところにすでに土地を確保。数年後にはグループホームをつくる計画だ。そのときは、三木さん兄妹を大家にしたいと考えている。

「かなり貯金がありますので、それを頭金にしてローンを組めればと思います。アパート形式の建物を建てて社会福祉法人に貸す形にして、家賃収入で暮らせればいいですね。小枝さんは結婚したい相手がいますので、夫婦で暮らせる部屋もつくりたいと考えています」

目下、重度障害者多数雇用事業所施設設置等助成金を申請中で、来年には近くに新工場ができる予定だ。

「実習生として初めて会社に来たとき、ほとんど何もできなかった知的障害者が、職業生活相談員や職場の人たちに励まされながら、二、三年もするとりっぱに仕事ができるようになる。それは職場の喜びですね。話したら切りがないくらい、一人ひとりのドラマはたくさんありますよ」

ケース巻き、収穫、芽だし、清掃と活躍する中島健さん（20歳）

知的障害者のことをまったく知らずに雇用を始めた柿島さんは、地域就労支援にかかわり、作業所をつくり、重度障害者多数雇用事業所の設立をめざし、さらにグループホームをつくろうとしている。柿島さんは、知的障害のある人たちがもっと一般社会の中で暮らしていけると思っている。

「施設から外に出られるような人たちがいっぱいいることを見てきていますから、知的障害者が企業で働き、一般社会の中で生活できるように、私たちができることをしていきたいと思います。地域の人たちから、本当にあの企業があってよかったと思われることをしたい。その一つが障害者雇用だと思っています。事業主の方には障害者雇用への理解をしていただきたいと思います」

可能性は誰にもある。できないとあきらめないで、できるところを見つけていく。前向きなやさしさが心に残る出会いだった。